

波枕 : 雑録

著者	松露
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 3
ページ	2 5 - 3 0
発行年	1897-02-10
その他の言語のタイトル	波枕 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4715

するなり。事實の確否とは、其書の載する所果して能く事實に合するや否やを確むるなり。世には往々偽書ながらも、其記する所の事實は却つて眞なるものあり。或は眞書にしても、日記舊記類の如きは、其記憶違ひ等よりして、事實の眞相を誤るものあり。此故に舊記古文書眞個の價値を定むるには、必ず先づ眞偽の鑑定をなし、兼て其事實の確否を正さるべからず。此二者は實に相關繋して離る可らざるものとす。今本書に就て考ふるに、其體例文字等より考察して、一見其偽書たるを知るべく、而して其記する所の事實全く眞を誤る。則ち本書は一毫採る可きの點なく、全く半文の價値をも有せずと斷定せざるを得ず。

波 枕

松 露

下、隱岐紀行

八月十三日、隱岐の嶋へ渡らんとて、松江を去りて船に乗り、夕境の港につきぬ。

れきの海白波いかに騒くとも吾はし行んその嶋の上に

十四日、朝早く四時に起き、第一隱岐丸に乗りて、美保關を左に見て日本海へと出ぬ。昔し後鳥羽院の隱岐に流され給ひて、陸路を出雲の見尾崎に出で給ひ、之より船にて嶋へと渡り給ふ時、都のかたへ遣し給ひてし御書のわくに、『まららめや浮身を崎の濱千鳥なくくまぼる袖のけしきを』と遊ばせし見尾崎が崎と、今呼ぶ美保關なるべくや、など思ひけるにむれたる千鳥、美保の鼻へと、なきてすぎぬ。

すめらぎの浮身を崎もうらみてし昔忍べとや衝嶋なり

此日天はすがらに波立で太平の世の静けさに、船はまばらくの間に、われを嶋前の知々井の港に送りぬ。同じ隠岐の島なれど、嶋前、嶋後の二つに分れ、本土に近き方を嶋前と呼びて、三つ四つの嶋より成り、嶋の前後の間は三里計りありと。われは先嶋後に行く可き身なれば、知々井は只眺つすぎて、嶋後の西郷の港に入りぬ。港の口は廣くして次第に狭くなり、又大きく廣くして船はこゝに多く安らかにねむれり。其様あだかも、わかしきなりひさこの如しともいふ可くして、誠によき港なりけり。船より陸に上りて直ちに嶋廳に至り、心かけし人を尋ねけるに、あらず、せん方なく宿につきて、日くれぬ内に隠岐のまはあみもれかしからんと、獨にて灣の内を泳ぎぬ。夕しかたなくそゝる歩きするに、怪しきもの此處にも彼處にもぞめきありき、淫らなる騷到る處に聞ゆ。絶海の孤嶋まして船多く集る所とて是非なけれど、うたてくて、快きあるさも得ならず、強ちに眠をつとめぬ。

十五日、西郷には早せんこともなく、嶋前に早くゆかんと思へど船出ず、空しく一日を送ることゝはなりぬ。こゝに今日牛づきてふものあり、珍しきものなれば見に行けどぞすゝめける。行んと思立ちよく聞けば日あしくて明日になりぬとなり、残り惜しけれどやむなく見ですこしぬ。その牛づきとは山間の霧の廣場に多くの牛を牽き來て二手に分れ、一つ突出して角組合せ角力はしむるなり、日本廣しといへども他處には此事けしてなき由と鼻うごめかしぬ。見たしと心ははやれど船の便なればせん方なし。

牛づきのうしや角力を見えさりき心つくしの旅の身にして

十六日、漸く船出づ。正午頃に至りて知々井につきぬ。知々井にてきゝたゞし、宿につきて午食したゝ

め後鳥羽院の御陵に行く道を尋ぬるに二里半計りにて藁てふ浦にはやがてなり、されど路險しく夏の日中は苦しかるべしと、勸むる如く止むる如し、思定て行んと道に上りぬ。日は中天に上りて路は羊腸奇軀、けわしき坂のつららをして、牛のあへぎの夫ならねと一步に一喘、いと々息たはしく漸う死ん計りに峰につきぬ。峰を涉りて行く程に、峰は長くつゞきて道の兩側は深き谷なりけり。息つきにと休めば知々井の港は海に臨みて眺よろしく、遙に目を南に放てば雲か山かと遠く出雲伯耆は見えぬ。又近き山の谷には牛馬なごの野飼してかきこゝに睡れり。進めば同じ峰つゞきにて道にはあはん人もなく寂しさあつさ言ん方なく、漸くにして道は坂を下りて村に出たればはしかりし水をえたゝかにのみぬ。

夏の日のれきの中山越行はふしたるうしの羨れける

御陵は何處と問へばそこなりと答ふ。つかれたる脚を早めて行くに、古き柱の立てる門の一搦へあり、之こそ兼て聞きにし村上助九郎氏の舊き邸にもやと、聞けばさなりとぞ、立寄りて見るに、邸の跡は荒れはて、箕子の歌ひし禾秀で、麥々たりとの如く桑生ひ繁りて家は形もなく、破れ庫の三つ計り残りて亭々たる松の古樹は昔をえのぶが如し長屋一つ破れ残れば昔しの家かと問へば赤痢流行りし時の避病小屋なりとぞあどばかりあきれてねかしかりき。移れば變る世の中の様こそ、實にや果なき極みなりけれ。後鳥羽院初めてこゝに流され給ひてし時、いぶせき苦屋のとまらせ給ふに餘りに便なきを見過しまゐらせ兼て、村上助九郎豪家なりけるものから、わが家にかしこきみことを移しまゐらせ厚き志をさゝげしとぞ。其跡のあれてわびしき様を見、暫くは去るに忍びざりき。

むら雲の光をかくすよの中に獨り君は玄月を眺めぬ

此處を去りて少し計り行けば、大なる松のさびしく立ちて御所の名残を止めぬ。院はわびしき中にも村上のもてなしに心安められけるに、北條の逆臣は猶も憂目を見せ參せんとて、こゝの飯御所に移し奉り、こゝにてかしこくも、院はうき命をのへ給ひて、やがて隠れさせ給ひぬ、鎌倉北條九代記に、是(見尾崎)より御船にめして、雲の浪煙の波を漕過て、隱岐國之ヲ郡刈田の郡といふ所に、御所とてつくり設けたる、怪しげなる庵の内に入せ給ふ。海少し近ければ、寄來る波の音たかく、梢をつたう嵐の聲、御夢をたに結ばねば、いとうき世をわびしうに、猿なゝきと悲まませ給へども、都にかへるつてもなし。

我こそは新島守よれきのうみのあらし波風心してふけ

とありて村上氏のことば見えず。刈田の郷とは今のこゝにして、隱岐にては村上氏を忠臣となしてもてはやせり。今に石槌といふ所に村上氏の子孫ありて、十六代歴々として郷士なりといふ。御陵は西面して小高き丘にあり、明治の御代に至り、厚く上より手を盡され、新しく垣ゆひまわし、後鳥羽院天皇御火葬地と標木を立て、かしこくいつさまつりぬ。われ御陵の前にかしこみぬかづきて、其昔の如何なりけん、かなしく涙を灑ぎぬ。其上にハ御行在所跡との碑を立て、井池など残り。

かまこくも新嶋守とすめらきの心をれきの昔かなし

海の入江は近く一町計りの前にありて、波の音松風につれて聲いとかなしくさびし。

しこくさを刈田の郷の御陵にうらみ蒲半の松風そふく

なかずの池音なしの松と、后の世に言傳へたるあり。昔し院在らせられし時、夏に至りて蛙しきりに喧しくなきければ、院には歌をよませて、なくなどありけるに、其池には蛙なかずなりぬとかや。又秋

立ちて風颯々とふく、松風の音騒しかりければ、又も歌をよませられけるに、松風の音の絶てけるとかや。院の歌は極めて功みなるは知れど、其徳無情のものに迄感せしめしと見えけり。又院には寂しき徒然の心やりに、田つくる牛をひかせて角力わせ給ひけり。之より牛づきと呼びて、毎年御陵の前にて献げまつる例となれりとなり。院には武の道も好ませ給ひ文武共にすぐらせ給ふ惜しき帝なりけるものを、いと々果なけれ。

なげかしと静まりませし昔を怨むやかはつ松風の聲

昔をしのぶ卿枕、旅にある身のいと々感せまつりて、あつさも忘れやゝまばし、茲に佇みて果しなく、日少ま下りければ、進まぬ足を急がせて菱浦に出てぬ。刈田の郷より菱迄半里計りありて、中に淺き入江を渡らざる可らず、後醍醐天皇は逃れ給ひしかど、院には菱よりならでは船出ず、逃れ給ふに術なかりきと覺し。菱浦より船をやとひて、西の嶋なる黒木御所に渡りぬ。黒木の御所とは元弘の昔、後醍醐天皇亦北條氏より流され給ひて、此處に黒木もてつくりたる御行在に入らせ給ひぬ。嶋の如く三方海なる突出たる小山にありて、西の嶋と中の嶋との間の最奥にあり、今は只黒木御所の跡とて、小さき社のまゝあるのみ。此頃紀念のまゝしをせんどの企ありとか聞きぬ。

天か下まろしめさせし皇の黒木の御所の跡のさひしき

夕日沈みて風颯々、隱岐の夕の凄まじく、菱に歸りて宿につきぬれば、明る朝より風吹き波あれて、出雲の方へ歸らんに船なく、空しく四日を費しぬ。漸く天晴れ波治まりて、船は本土より來りて、宿の子山本源太郎君歸省しぬ。今中學にありとて年未だ壯ならねど、よく話しするに面白く、壯なる志あり。隱岐の人の中學以上に學ぶは三四人なりとかや、學事盛ならざるは宜なれど、今少しと思われき。

二十二日、朝第二隱岐丸にて菱浦を船出し、境を経て松江に歸りぬ。

海原のれきを遙かに尋ねれば跡を忍ぶの艸の露けさ

かき集めたる藻しほ艸のみるも拙き筆のしづくにて面白きふしも荒磯波に洗われけんさわらひ給はゞ幸多かりきなん

韓 文 公

(承前)

杏 城 生

第四章 失意時代

(六) 東都に行く

彼は已に困難の極底に陥れり。鄭夫人の死は彼の腸を寸断せり、胸壑を破れり。然らば彼が精神は既に消耗したるか。曰く否、大に否。彼が猛然たる胸中の烈火はこの時燃へ上りしなり。彼は奮然として起てり。彼は運命を天に任せて、先づ何れの藩鎮にか任を求めんとせり。家門は直に後にせられつ、足は洛陽の方向に轉せられたり。

時正に貞元十一年九月暮秋。浙瀝たる風は木の葉なき樹梢をわたりていとものすこく利鎌の月は峯巒の端に沈んで天地冥晦。世界は恰も凜烈たる『年の死』を迎ふる用意をなすものに似たり。乾坤も亦彼が爲に悲むある乎。彼が家嶺の麓邊を過ぐる頃ひ、太陽は已に高く登りて、寒たげなる雲間より彼の頭上を照せり。太陽は彼を救ふに心ある乎。彼は四方の光景を見るにつけ過ぎにしことのみ思ひ出されつ、今迄の勇氣もいづにかうせて、心身全く疲れはて、彼が胸中の烈火も、あはれ、いつしか幽かとなれり。